

手嶋 龍一・選

現代アメリカの素顔

- ①歴史の探求——個人的冒険の回想 上・下（セオドア・H・ホワイト著、堀たお子訳／サイマル出版会／絶版）
- ②ベスト&フライテスト 上・中・下（デイヴィッド・ハルバースタム著、浅野輔訳／二玄社／各1836円）
- ③アメリカの反知性主義（リチャード・ホーフスタッター著、田村哲夫訳／みすず書房／5616円）



和田 誠

「ポストンの政治が与えうる善意のすべては、数え切れぬドルとともにこの種の荒唐を阻止するために集められたのである。——そしてそれは失敗に終わった」

ケネディ政権の誕生を雄勁な文体で描いたセオドア・H・ホワイトは、続く大統領選の取材で、生まれ育ったサウス・ポストンの街を久々に訪れた。だが愛する故郷は黒人の無法地帯に変わり果てていた。「歴史の探求」は、かつてベールを焼く香りが漂う街が変貌してしまっただけに立ち竦む自らを三人称で叙述している。並ぶものなき豊かな国の底辺で深化する凄まじいばかりの貧困はホワイトを打ちのめした。

オバマ青年は黒人奴隷の血をひかない。それゆえ自らシカゴの最貧地帯に赴くことで「アメリカの黒人」となった。やがて「チェンジ」を唱えてホワイトハウスを目指した。だが希望に満ちて船出したオバマ政権をいま深い挫折感が覆っている。その反動なのだろう。民主党では貧しくて大学に進めない若者の熱い支持を集めるサンダース氏が本命のクリントン氏を苦しめ、共和党でも不法移民に職を奪われるプア・ホワイトの不満を煽るトランプ旋風が吹き荒れている。アメリカの語り部ホワイトの暗い予見は今日の事態を恰似に言い当てていたのである。

一方でホワイトの生きた時代には、エスタブリッシュメントが社会の中枢を牛耳っていた。ハルバースタムの名著『ベスト&フライテスト』は、巨大な金融機関と有力な法律事務所を根城にアメリカの運命を差配する者たちの素顔が見事に描かれている。キューバのミサイル危機に直面したケネディ大統領は、東部エスタブリッシュメントの象徴であり、銀行家にして国家の要職を歴任したロベットの翁を訪ねて教えを乞うた。権力のプロローグを自認する陰の人物は「実はあなたには投票しなかった」とかつて打ち明けたことがある。ロベットの翁は若き大統領に「核のボタンを押す覚悟はお持ちか」と確かめて危機を打開する穩健な秘策を授けたのだった。

アメリカはいま左右のアウトサイダーが大統領選のフロントに躍り出て、主流派を青ざめさせている。反知性主義の奔流に主流派も既存のメディアも呑み込まれつつある。怒れる人々は指導者に知性ではなく、決断力をこそ求めている。トランプ氏に知性がないのではない。我々はアメリカの大都会に土地勘はあっても、多民族国家を翻弄する潮流を何ほども知らない。